OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『聖アントワーヌの誘惑』（1849）におけるインドの神々
Author(s)	金﨑, 春幸
Citation	Gallia. 2019, 58, p. 49-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72870
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『聖アントワーヌの誘惑』（1849）におけるインドの神々

金﨑　春幸

『聖アントワーヌの誘惑』でアントワーヌの前に次々とあらわれる神々のうち、インドの神々は、テクスト上、名前がないという点で特異な存在である。文字通り身元不明の異形の神々は、アントワーヌを惑わせただけではなく、これまでフローベール研究者をも少なからず悩ませてきた。ジャン・セズネックによる起源研究も[1]、新しいプレイアード版の注釈も[2]、完全に謎を解き明かしたとは言い難い。本論文では、1848年5月から1849年9月までの間に執筆された第1稿を中心に、インドの神々に関する読書ノート、セナリオ、プランから清書原稿までに至る生成過程をたどりながら、登場する神々を正確に同定し、その配列の意味を明らかにしていきたい。

執筆前の準備

フランス国立図書館に保存された『聖アントワーヌの誘惑』の草稿の中に、「インド」と題された6頁にわたる読書ノートがある[3]。そのうち、最後の2頁には「バラモンの理想」「ブッダ」と見出しがついているので[4]、インド固有の神々に関するノートは初めの4頁までである。

1頁目にはまず、「メール山／4つの河。正方形の湖から発する。ガンジス河は銀の馬の口から流れる…」といった宇宙の中心にある山や神話的な4つの河に関する説明があるが[5]、これはアベル＝レミュザの「中国の著者による仏教徒の宇宙形状および宇宙創成に関する試論」から引用されたものである[6]。その下方には、次のような記載がある。

1）Jean Seznec, *Les sources de l'épisode des Dieux dans* La Tentation de saint Antoine *(Première version, 1849)*, Paris, Vrin, 1940.

2）Flaubert, *La Tentation de saint Antoine* (Version de 1849), in *Œuvres complètes,* Tome II : 1845-1851, Édition publiée sous la direction de Claudine Gothot-Mersch, avec, pour ce volume, la collaboration de Stéphanie Dord-Crouslé, Yvan Leclerc, Guy Sagnes et Gisèle Séginger, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2013. 以下、このプレイアード版を *OC,* II と略記する。

3）Bibliothèque nationale de France, N.a.fr. 23671, f° 179, f° 179 v°, f° 181, f° 181 v°, f° 180, f° 180 v°.

4）バラモンやブッダについては、以下の拙論参照：「『聖アントワーヌの誘惑』におけるバラモンとブッダ」、*GALLIA* 第57号、大阪大学フランス語フランス文学会、2018年3月、45-54頁。

5）« Mérou / Quatre fleuves. sortant d'un lac carré. le Gange coule de la bouche d'un cheval d'argent [...] »（N.a.fr. 23671, f° 179）. 草稿の転写はできるだけ元の状態を再現している。

6）Jean-Pierre Abel-Rémusat, « Essai sur la cosmographie et la cosmogonie des bouddhistes, d'après les auteurs chinois », in *Mélanges posthumes d'histoire et de littérature orientales*, Paris, Imprimerie Royale, 1843, p. 77.

Brahma a p^{r} symbole la terre
Siva ——————— le feu -
Vichnou ——————— l'eau.
} trimourti. ont p^{r} mère Bhavani [7]

これは、フリードリッヒ・クロイツェル『古代の宗教』第1巻にある「ブラフマーの象徴は大地、ヴィシュヌは水、シヴァは火」、「三つの神はバヴァーニーを母とする」、「これら三つの大神は、トリムールティと呼ばれるインドの三位一体をかたちづくる」という記述をまとめたものである[8]。このトリムールティに関する記載の後に、原初の神ブラフム、破壊の神シヴァ、その息子のガネーシャとカルティケーヤ、さらに2頁目の維持の神ヴィシュヌとその数々の化身、ヴィシュヌの妻ラクシュミー、ヴィシュヌの8番目の化身クリシュナまで、クロイツェル『古代の宗教』第1巻における神々の説明から抜粋したり、要約した文章が続く。ノートの3頁目からは創造の神ブラフマーに関する記述となり、やはり『古代の宗教』第1巻からの引用が続くが、同じ頁の下から10行目から『バガヴァッド・ギーター』を出典とする文章が並ぶようになる。4頁目の「ブラフマーは地、水、火、エーテル、心、理解力、自己意識である」も『バガヴァッド・ギーター』第7章から引かれている[9]。ただし、原典では「私の原理は、地、水、火、風、エーテル、心、理解力、自己意識の8つに分かれている」と語るのはブラフマーではなく、クリシュナである[10]。フローベールは、クリシュナが自らの根本原理について語った言葉の主体をあえて変えて、ブラフマーの根本原理として、ノートに記したのである。おそらくクロイツェル『古代の宗教』の記述だけでは創造神ブラフマーを描くには不十分だと考えて、『バガヴァッド・ギーター』のクリシュナの言葉を転用したのであろう。4頁目の下半分では、雷神インドラ、火の神アグニといった、主にリグ・ヴェーダで崇められた神々について書かれている。これらヴェーダの神々に関しては、クロイツェル『古代の宗教』から取られた箇所もあるが、中心となるのはフェリックス・ネーヴの『リグ・ヴェーダ讃歌に関する研究』を出典とする文章である[11]。

7）N.a.fr. 23671, f° 179. 引用中の «p^{r}» は pour の略記である。

8）«Le symbole de Brahmâ, c'est la terre ; l'eau, de Vichnou ; le feu, de Siva. [...] ils ont pour mère Bhavani [...]. Ces trois dieux [...] forment la trinité hindoue, appelée *Trimourti* [...]»（Frédéric Creuzer, *Religions de l'antiquité, considérées principalement dans leurs formes symboliques et mythologiques*, Ouvrage traduit de l'allemand, refondu en partie, complété et développé par Joseph-Daniel Guigniaut, Paris, Treuttel et Würtz, Tome I, 1825, pp. 150-151.「インド」に関する読書ノートには、1頁目の «（V. Creuz. I^{er}. 152）» など、このギニョーによるフランス語訳『古代の宗教』からの出典頁の記載が3箇所ある。

9）«Brahma est terre, eau, feu, éther, esprit, intelligence, conscience de soi-même [...]» （N.a.fr. 23671, f° 181 v°）.

10）«My principle is devided into eight distinctions : earth, water, fire, air, and æther（*Khăng*）; together with mind, understanding, and *Ăhăng-kār*,（self-consciousness）[...]»（*The Bhăgvăt-Gēētă, or Dialogues of Krĕĕshnă and Ărjŏŏn,* Translated from the original in the Sănskrĕĕt by Charles Wilkins, London, C. Nourse, 1785, p. 69）. フローベールが『バガヴァド・ギーター』からノートを作成するにあたって、ウィルキンスによる英語訳を参照したことについては、前掲拙論の47頁、注10参照。

11）Félix Nève, *Études sur les hymnes du Rig-Vêda*, Paris, Benjamin Duprat, 1842.

『リグ・ヴェーダ讃歌に関する研究』の序文で、ネーヴはインドの宗教の聖典を3つの時期に分けている。第1の時期はヴェーダで、もっとも古い自然崇拝の時代の経典、第2は叙事詩で、次々と化身していく英雄的な神を謳ったもの、第3はプラーナで、それまでの多くの神話伝説に哲学や歴史や祭式などを新たな観点から付け加えた集大成的な文献である[12]。一方、クロイツェルは『古代の宗教』第1巻の第1章でインドの宗教の歴史にごく簡単に触れるものの、第2章からはインドの宗教の柱となるトリムールティから始めて、シヴァ、ヴィシュヌ、そしてそれらとつながる神々や数々の化身の話になり、第4章で創世神話にまつわるブラフマー、そしてヴェーダのことを語っていく。時間軸を無視しているというよりは、時間軸を遡っているように見える。そうかと思うと、次の第5章では仏教の説明になるのだから、何か一貫性の欠ける記述となっていることは否定できない。フローベールはこのクロイツェルの記述の順番を忠実に守り、それを基本として、アベル＝レミュザの論文や『バガヴァッド・ギーター』、ネーヴの著作などから取ったものを差し挟みながら、読書ノートを構成している。

読書ノートの後、セナリオ作成の段階に入る。神々の場面全体のセナリオは3つつくられており、その第2セナリオには、次のように書かれる[13]。

dieux indiens 1° Vêdas - 2° brahmanisme 3° buddhisme [...]
les dieux de l'Inde ne doivent pas paraître puisqu'ils existent
encore actuellement - les désigner seulem[ent] par leurs attributs
dieux à têtes d'éléph[ant] etc - [...]
[...]
le Gange traînant après lui tous les dieux indiens[14]

最初に「1° ヴェーダ、2° バラモン教[15]、3° 仏教」と書かれる。ここではネーヴにしたがって、ヴェーダを1番目にもってきている。この番号のつけ方からみると、まずヴェーダの神々、次にバラモンの神々、そしてブッダが順々にアントワーヌの前にあらわれる場面を考えていたらしい。最初の行の下に「インドの神々は今

12）*Ibid.*, pp. 1-2.

13）『聖アントワーヌの誘惑』のセナリオはジゼル・セジャンジェールによって分類され、転写されている：Flaubert, *Scénarios de* La Tentation de saint Antoine : *Le Temps de l'œuvre*, Présentation, transcription et notes par Gisèle Séginger, Presses Universitaires de Rouen et du Havre, 2014. 本論文では、「第2セナリオ」等の名称はセジャンジェールのものを踏襲しているが、引用する際は筆者が直接草稿から転写し、参考として上記刊本を *Scénarios* と略記して頁数を併記する。

14）N.a.fr. 23671, f° 186 v° ; *Scénarios*, p. 154. 引用で、途中までしか書かれていない語がある場合は [ ] で補っている。

15）«brahmanisme» という語は、19世紀の前半においては、ヴェーダが聖典として成立した時代の宗教ではなく、後代のブラフマーやヴィシュヌやシヴァなどの神々が崇められた宗教を指すものとして使われていた（Cf. Nève, *op.cit*, p. 98）。フローベールがセナリオに «1° Vêdas - 2° brahmanisme» と書くとき、«brahmanisme» は明らかにヴェーダ時代以降のことを指しており、現代ではむしろ «hindouisme»（ヒンドゥー教）と呼ばれるものに近い。本論文では、シヴァやヴィシュヌなど、ヴェーダ時代以降の神々は、セナリオの表現に合わせて、（ヒンドゥーの神々ではなく）バラモンの神々と称することにする。

なお存在しているので」「象の頭をもった神々など、その属性によってのみ指し示すこと」と書き込まれる。さらにその下方に、「ガンジスが背後にインドのすべての神々を引き連れる」という文が書き足される。ここで、インドの神々は名前を持たぬまま、ガンジスに率いられて登場するという基本線が定まることとなる。

第3セナリオでは次のようになる。

[16]

最初は「星々」に導かれて登場する情景を考えていたのかもしれないが、とにかくそれは抹消され、ガンジスによってインドの神々は先導されることになる。神々の順番も、アグニがトリムールティの後に来ていたものが、上に番号がつくことによって、まずインドラ、アグニというヴェーダの神々、その後にトリムールティに代表されるバラモンの神々という順番に整えられる。第2セナリオにあった仏教はここでは姿を消している。最後に「山車に乗ったスーリヤ」という書き込みがあるが[17]、これはクロイツェル『古代の宗教』第1巻の「スーリヤは太陽の神であり」「その山車には7頭の緑の駿馬が繋がれている」という記述から取られている[18]。フローベールは、インドを象徴するガンジスに、大きな山車に乗ったスーリヤを重ね合わせて、インドの神々の集団がガンジスが率いる山車に詰め込まれて登場するイメージをつくりあげたのである。

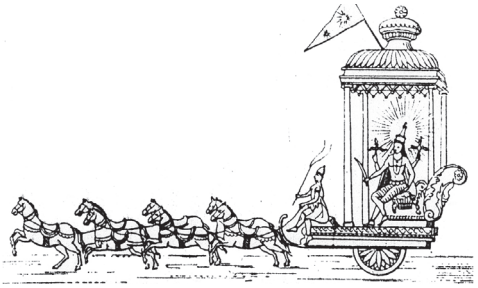
セナリオで骨格ができあがり、2頁から成るインドの神々のためのプランではそれに肉づけがされる。最初のガンジス登場はプランでは次のようになる。

Char du Gange - en ivoire
le Gange sur le siège - Dais de saphir à franges de pourpre - [...] - 2 roues,
[...] le moyeu = fleur de lotus ouverte -
9 rangées. 7 par 7. 63 chev[aux] blancs crin[ière] fais[ant] des flots [...]
le Gange. tête de taureau. Cornes de bélier très recourbées. [...][19]

この象牙でできた山車に乗るガンジスは、フローベールが読書ノートをとるために参照した文献には存在しない。彼の創作である。この «le Gange» は現実の河ではなく、読書ノートの1頁目にあるように宇宙の中心の山のふもとから流れる神話上のガンジス河である（注5）。神話上のガンジスの上に第3セナリオにある太陽神スーリヤが重なる。スーリヤの乗る山車は『古代の宗教』の第1巻には詳し

16）N.a.fr. 23671, f° 171 ; *Scénarios*, p. 156.
17）セジャンジェールは «Sourya» を «Dourga» と転写しているが（*Scénarios*, p. 156）、これは読み誤りである。なお、クロイツェルによれば、戦の女神ドゥルガーが乗るのは山車ではなく、獅子である：«*Dourga*, [...] montée sur un lion [...]»（Creuzer, *op. cit*, I, p. 165）.
18）«Sourya [...] est le dieu du soleil [...]. [...] son char est attelé de sept coursiers verts»（Creuzer, *op. cit*, I, pp. 250-251）.
19）N.a.fr. 23671, f° 185.

く描かれていないが、同書の第4巻に収められた図版が壮麗な「天蓋」をもち、「二つの車輪」で支えられ、「車輪の中央」は「開いた蓮の花」のように見える山車を描いている（図版1）[20]。さらにフローベールはこの図版の7頭の馬を、プランでは「7頭ずつ」「9列」にして合計「63頭の白馬」としている。また、引用の最終行にあるように、図版1では人間の顔をしたスーリヤを、プランでは「雄牛の頭」で「雄羊のくるっと曲がった角」をもったものとして描いている。この姿は、図版1が元々あった『古代の宗教』第4巻の頁と同じ頁にある、雄羊の頭をしたダクシャの姿を借りたものだと思われる（図版2）[21]。フローベールは神話上のガンジスの上に山車に乗ったスーリヤの図像を重ね、さらにその顔にダクシャの図像を重ね合わせたのであろう。このような視覚的要素重視はプラン全体に見られ、「山車の中にあるもの」という記載のところには「23. IV.」のように[22]、神の名前ではなく、『古代の宗教』第4巻の図版の番号と頁数を書いている。



図版1（93. XVI.）

図版2（81. XVI.）

ヴェーダやバラモンの神々についても、同様のことが言える。ヴェーダの神インドラの項目には、「体中に目が散らばる」、「3つの鼻の象にまたがる」、「背後に4羽の孔雀がとまった木がある」といったようにプランでは記載されているが[23]、上半身のあちこちに目があり（図版3）、3つの鼻の象に乗り、後ろの木に孔雀が4羽とまっている（図版4）インドラの姿が『古代

図版3（83. XV.）

図版4（84. XV.）

20）本論文で掲載する図版はすべて『古代の宗教』第4巻第2部から取ったものである：Creuzer, *op. cit*, tome IV, 1841. 引用した各図版の下の括弧の中に、原著の図版の番号と頁数（ローマ数字）を記している。

21）図版2は原著では図版1と同じ頁のすぐ左下にある。図版2は、『古代の宗教』第4巻第1部の説明では«*Dakcha* ou *Dakcha-Brahmâ*, à tête de bélier, [...], à proprement parler, une forme de Brahmâ [...]»となっている（Creuzer, *op. cit*, IV, p. 16）。

22）«ce qu'il y a dans le char — 23. IV. [...]»（N.a.fr. 23671, f° 172 v°）.

23）«Indra. le corps parsemé d'yeux - [...] monté sur l'éléphant à 3 trompes [...] derrière lui un arbre av[ec] 4 paons»（ibid.）.

の宗教』第4巻に見られる。バラモンの神々については、フローベールはまず1頁目のプランで、読書ノートの中からシヴァ、クリシュナ、ヴィシュヌ、ラクシュミー、ブラフマーを選び出し、その外観の特徴や神話をまとめていく。ここでは最初のシヴァに関する記述を見ていこう。

> Siva le feu sort de sa bouche armée de dents tranch[antes] [...] - ceint de serpens. [...]
> (38.VIII.)
> escorté de Ganesa = tête d'éléph[ant] à une défense - gros vent[re] [...]
> (39.VIII.)
> et de Cartikeya 7 têtes. 14 bras monté sur un paon - [...][24)]

この記述はすべて、『古代の宗教』第1巻を出典とする読書ノートからの抜粋に、同書第4巻の図版に関する情報を付け加えたものである。シヴァは、読書ノート1頁目で描かれた「鋭利な歯を備えた口から火が出る」「何匹もの蛇がまきついた」姿のままである[25)]。読書ノートでは「シヴァは息子に伴われていて」、第一子のガネーシャは「牙が一つしかない象の頭」と「太鼓腹」をもち、第二子のカルティケーヤは「6か7の頭と14の腕をもち、孔雀の上に乗っている」と書かれていたが[26)]、それがほとんどそのままプランに書き写されている。異なるのは、プランでは、ガネーシャとカルティケーヤという名の上に「38.VIII.」「39.VIII.」という『古代の宗教』第4巻の図版の番号と頁数がつけられている点である。

図版5（38. VIII.）

図版6（39. VIII.）

このようにシヴァなどの神々に関する情報をまとめた後、フローベールはプランの2頁目で、次のように順番を並べ替え、整理し直す。

24）N.a.fr. 23671, f° 172 v°.
25）«le feu sort de sa bouche armée de dents tranchantes, [...] ceint de serpens»（N.a.fr. 23671, f° 179）. Cf. Creuzer, *op. cit.*, I, p. 160.
26）«Siva est accompagné de son fils [...] Ganesa [...] il a une tête d'éléphant armée d'une seule défense, et un gros ventre [...]», «Cartikeya 2e fils de Siva [...]. [...] on le voit avec six ou 7 têtes, 14 bras, monte un paon»（N.a.fr. 23671, f° 179）. Cf. Creuzer, *op. cit.*, I, pp. 167-168.

Lachmi –
Vichnou
chev[eux] hâlés
Siva & ses deux fils – J'ai changé & je deviens
moi-même – état double alternatif
Brahma – je suis – je suis – tous ses attributs lui échapp[ent]
– Crichna[27)]

まずラクシュミー[28)]、次にヴィシュヌがあらわれる。次のシヴァとブラフマーのところでは、二つの神が語る言葉が書かれている。ブラフマーの言葉の「私は…」「私は…」の欠落部分には、読書ノートの4頁目に書かれていたブラフマーの基本原理「地、水、火…」（実はクリシュナの基本原理）が入るわけだが、それら「すべての属性が抜け落ちる」。そして最後にクリシュナが来るのだが、このグループで中核となるのがトリムールティ、つまりヴィシュヌ、シヴァ、ブラフマーであることは言うまでもない。ラクシュミーはヴィシュヌの妻であり、その先導役をになう。その後にトリムールティが挟まって、クリシュナが最後を締める。フローベールは第3セナリオで当初「インドラ、トリムールティ、アグニ」といったようにトリムールティの前後にヴェーダの神を置く構図を思い描いていたのだが（注16）、今度は別のバラモンの神を前後に置くかたちで再現しようとしたのである。

これでようやく準備が終わり、執筆開始となる。

清書原稿

フランス国立図書館に、N.a.fr. 23664という分類番号のついた523枚の草稿がある。大部分が『聖アントワーヌの誘惑』第1稿の清書原稿であり、表頁にのみ書かれているのだが、2枚の草稿だけ表裏に書かれ、しかも内容が1856年の第2稿に近くなっている[29)]。残りの521枚の草稿にも、1848年5月から1849年9月にかけて修正をほどこしながら書き上げたものの他に、第2稿の下書きとなるような削除・修正の跡が見られる。つまり、このN.a.fr. 23664の草稿群は、1849年9月に執筆を終えた状態のままではなく、1856年にフローベールが第2稿を作成するための第一段階として、第1稿の清書原稿に手を入れた（書簡の表現を借りれば「剪定した[30)]」）結果の状態なのである。表裏に書かれた2枚の草稿も作業の途中で挟み込まれて、そのままになってしまったものにちがいない。要するに、N.a.fr. 23664の草稿は、1849年9月に書き上げられた状態の上に、1856年の第一段階の

27）N.a.fr. 23671, f° 185.
28）フローベールは«Lakchmi»を、プランでは«Lachmi»と3度にわたって書いている。読書ノートではクロイツェルの著作の通りの綴りを書いていたのだが、覚え違いをしてしまったようである。
29）N.a.fr. 23664, f° 14bis & f° 430-31-32.
30）«J'ai dans *Saint Antoine* élagué tout ce qui me semble intempestif»（Flaubert, *Correspondance*, Tome II, Édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, p. 613）.

削除・修正がかぶさったものなのである。

インドの神々の場面は N.a.fr. 23664 の 435 頁から 443 頁までと 446 頁から 448 頁までである[31]。444 頁と 445 頁は欠落している。読書ノートやプランなどと照合しながら、順に清書原稿を見ていこう。

最初の 435 頁で、「ガンジスが象牙の山車に自分のすべての神々を引き連れてやってくる[32]」。ガンジスは、プラン（注 19）にあったように、「雄牛の頭に雄羊の角」を生やしている[33]。山車に詰め込まれているのは、「多くの頭、多くの腕、多くの足をもった神々」などと描かれるが[34]、このような異形の神々はクロイツェルの第 4 巻の図版には多く見いだされるので、特定の神を指すものではない。438 頁で死神が鞭を鳴らすと、次の頁で「我々の絶え間のない化身は、再生は、高揚は、勝利はもう終わってしまったのか」などと言って[35]、ガンジスの神々は嘆く。

440 頁目になると、「体が目で覆いつくされ、3 つの鼻の象にまたがった神」があらわれる[36]。この神は、プラン（注 23）や図版 3･4 が示す通り、ヴェーダの神インドラである。インドラは火の神アグニ、暁の女神ウシャスなどに「どこにいるのか」と問いかけ、姿が見えないことを悲しむ。

441 頁以降はバラモンの神々となる。プラン（注 27）によれば、最初に登場するのはラクシュミーなのだが、「幾筋もの光が出ている花の冠を被り、動物たちが描かれている青い布をまとい、金の輪で縁取られた乳房から乳がほとばしっている」姿は[37]、『古代の宗教』第 4 巻ではマーヤーであると説明されている[38]。実は、この女神は本体はラクシュミーで、マーヤー、正確に言えばモーハニー・マーヤーの姿であらわれたものである[39]。読書ノートに「モーハニー・マーヤー、偽りの美、ラクシュミーの変形。巨人たちを誘惑して不老不死の薬を奪い取るためにヴィシュヌがまとったかたち」とあるように[40]、ラクシュミーは、アントワーヌを誘惑するために偽りの美であるモーハニー・マーヤーのかたちを借りてあらわれたのである。

次の 442 頁で登場する「真っ青で、耳輪をつけた猪の頭、四つの手に蓮、ほら

31）N.a.fr. 23664 では、フローベールが記している頁番号がそのままフォリオの番号になっている。

32）«[...] arrive le Gange, traînant dans un charriot d'ivoire tous ses dieux ~~qu'il emporte~~»（N.a.fr. 23664, f° 435）.

33）«[...] il a une tête de taureau avec des cornes de bélier [...]»（ibid.）.

34）«Dieux à plusieurs têtes, à plusieurs ~~mains~~ bras, à plusieurs pieds [...]»（N.a.fr. 23664, f° 436）.

35）«sont-elles finies nos incarnations successives, [...] nos renaissances, nos exaltations et nos triomphes !»（N.a.fr. 23664, f° 439）.

36）«Un dieu,（le corps tout couvert d'yeux, monté sur un éléphant ~~qui~~ à trois trompes [...]）»（N.a.fr. 23664, f° 440）.

37）«Une Déesse（[...] coiffée de fleurs d'où sortent des rayons, vêtue d'une écharpe bleue où sont peints des animaux. [...] - de ses seins cerclés de bracelets d'or, il jaillit du lait）»（N.a.fr. 23664, f° 441）.

38）«Maya, mère de la mer de lait, matière première de toutes choses, qui s'écoule de son sein en deux ruisseaux [...]»（Creuzer, *op. cit.*, IV, p. 20）.

39）サンスクリット語で«môhanî»は「心を惑わす」、«mâyâ»は「幻」を意味する。

40）«Mohani Maya, la fausse beauté, variante de Lakchmi. forme que Vichnou prit lui-même p^r^ séduire les géans et leur enlev[er] l'amrita»（N.a.fr. 23671, f° 179 v°）. Cf. Creuzer, *op. cit.*, I. p. 197.

貝、環と錫杖をもつ神」は[41]、読書ノートの記述にあるように[42]、ヴィシュヌである。ヴィシュヌは10回化身をするのだが、ここでは第3化身の猪の姿でアントワーヌの前にあらわれ、過去・現在・未来の化身の様を物語る。第1化身の魚、第2化身の亀、第3化身の猪、第4化身の半獅子半人、第5化身の小人、第6化身の斧をもつバラモン、第7化身の戦士（ラーマ）を経て、やがて第10化身としてこの世の終わりに地上の罪を一掃する存在（カルキ）となる[43]。そして443頁の最後に「しかし、かつて波のない海のただ中で、私の臍から緑の茎が伸びて、そこから新たな神が花開くのを微笑みながら見つめていたのは私だ」と言う[44]。これはクロイツェル『古代の宗教』第1巻で、ヴィシュヌが「彼の要素（＝水）の上で休んでいたとき、突然、臍から一本の蓮の幹が伸びて、この美しい花の萼の上に座ったブラフマーが、創造を完成させるためにあらわれる」と説明されている情景である[45]。

444頁と445頁は欠落している。次の446頁の冒頭であらわれる「翼を広げた白鳥に乗り、顎鬚をはやしたすべて同じ4つの顔をもつ神」[46]は、読書ノートにあるように[47]、ブラフマーである。ブラフマーは「私は地、私は水…」と[48]、自らの根本原理を語り始めるが、すべてを言い終わらないうちに消えてしまう。

447頁で登場する「黒い神」は、その名が示すようにクリシュナである[49]。クリシュナの「額には一つの目、開いた蓮の花が首にかかり、足の裏に三角形がある[50]」という姿は読書ノートにはなく、『古代の宗教』第1巻から直接取られたものである[51]。クリシュナは悲しそうな様子で、自分のしてきたことがすべて無駄であったと嘆き、森の修行者のことを語った後、山車とともに消えてしまう。

以上の草稿の流れを見ればすぐにわかることだが、プラン（注27）でヴィシュ

41）«Un Dieu（tout bleu à tête de sanglier avec des boucles d'oreilles tenant dans ses quatre mains un lotus, une conque, un cercle, un sceptre）»（N.a.fr. 23664, f° 442）.

42）«son teint est bleu - [...] la première de ses mains tient ce lotus. la seconde le Sankha sorte de conque, la troisième le cercle, la quatrième le sceptre du monde»（N.a.fr. 23671, f° 179 v°）. Cf. Creuzer, *op. cit.*, I, p. 194.

43）ヴィシュヌの第8化身はクリシュナ、第9化身はブッダであるが、これらの化身については語られない。

44）«c'est moi ~~cependant~~ p^r^tant qui jadis au sein de la mer immobile, [...], contemplais en souriant s'élever de mon nombril la tige verte d'où devait éclore le Dieu nouveau»（N.a.fr. 23664, f° 443）.

45）«[...] pendant qu'il repose sur son élément, [...] tout à coup sort de son nombril une tige de lotus, et Brahmâ paraît, assis sur le calice de cette belle fleur, pour accomplir la création»（Creuzer, *op. cit.*, I, pp. 177-178）.

46）«Autre Dieu [...] porté sur un cygne aux ailes déployées, ayant quatre figures à mentons barbus toutes pareilles [...]»（N.a.fr. 23664, f° 446）.

47）«souvent on le représ[ente] sur un cygne, avec une long[ue] barbe à chacun de ses quat[re] mentons [...]»（N.a.fr. 23671, f° 181）. Cf. Creuzer, *op. cit.*, I. p. 243.

48）«~~Je suis~~ je suis la terre ~~je suis~~ je suis l'eau ~~je suis~~ je suis le feu ~~je suis~~ je suis l'air [...]»（N.a.fr. 23664, f° 446）.

49）サンスクリット語で«kṛṣṇa»は「黒い」という形容詞である。

50）«Un dieu noir（portant un œil sur le front, un lotus ouvert suspendu à son cou, et le triangle sous la plante des pieds [...]）»（N.a.fr. 23664, f° 447）.

51）«Ce dieu [...] portant sur son front le signe sacré du soleil, l'œil qui voit tout ; le lotus ouvert suspendu à son cou, le triangle ou le pentagone magique sous la plante des pieds ou dans la paume de la main»（Creuzer, *op. cit.*, I, p. 210）.

ヌとブラフマーの間にあったシヴァがすっぽり抜け落ちている。今、清書原稿の N.a.fr. 23664 から下書き草稿が収められた N.a.fr. 23669 に目を転じると、そこに 444 と 445 という頁づけがフローベールによってなされた 2 枚の草稿がある[52]。その 1 頁目の冒頭で「三柱の神」があらわれ、「最初の神は、髭に炎がそそり立ち、何匹もの蛇が体にまきついて」おり、「2 番目の神は太鼓腹をして、牙が一つしかない象の頭」をもち、「3 番目の神は孔雀の上に乗り、7 つの頭と 14 の腕をもっている」[53]。言うまでもなく、これはプラン（注 24）にあった通り、シヴァとその第一子ガネーシャ、第二子カルティケーヤの姿である。そして 2 頁目の最後に、シヴァの髭の炎は消え、蛇もほどけるなど、息子の二神とともに衰え果てた姿をさらす。内容から見ても、フローベールがつけた通し頁から見ても、この 2 枚の草稿が清書原稿として書かれ、ヴィシュヌの場面とブラフマーの場面の間に挟まれていたことは疑いがない。少なくともインドの神々の場面が執筆された 1849 年 6 月には、清書原稿として組み込まれていたはずである。もしインドの神々の執筆の最中あるいはほどない時期に清書原稿の束から抜かれたのであれば、446 頁以降を 2 頁ずつ繰り上げるなどの処置をおこなったであろう。そうすると、2 枚の草稿が清書原稿から除かれたのは、1849 年 9 月 12 日に最後の頁を書き終える前後の時期にもう一度見直したときか、1856 年に第 2 稿作成のために第 1 稿を「剪定した」ときか、どちらかになる。いずれの時期が正解なのか、判定し難い。

では、なぜシヴァが息子とともにあらわれる場面は清書原稿から取り除かれたのか。プランの段階では、バラモンの神々の中核はトリムールティで、その真ん中に位置するのがシヴァであった。その通りに清書原稿をつくったのだが、フローベールは読み返したとき、443 頁の最後でヴィシュヌの臍からブラフマーが誕生し、シヴァと息子の二神の場面をはさんで、446 頁でブラフマーがあらわれることに、流れの悪さを感じたにちがいない。シヴァたちがなくなるとブラフマーの誕生とその登場が難なくつながる。また、バラモンの神々のうち最初のラクシュミーはヴィシュヌの妻で、最後のクリシュナはヴィシュヌの第 8 化身だから、バラモンの四神はヴィシュヌという一本の糸でつながることになる。もちろん、シヴァの削除によってインドの神々の場面は中心的な神を失うことになるし、トリムールティも崩壊してしまう[54]。それでも最終的に、フローベールはつながりの自然さの方を優先したのである。

（大阪大学名誉教授）

52）N.a.fr. 23669, f° 299 & f° 300. この 2 枚の草稿の裏面には何も書かれていない。下書き原稿の場合は、紙を有効に使うために、たいてい両面に書き込まれている。

53）« trois ~~autres~~ Dieux / le Premier [...] ~~la chevelure~~ la barbe hérissée de flammes - le corps ceint de serpens. le Second [...] portant un gros ventre - avec [...] une tête d'éléphant qui n'a qu'une seule défense. le troisième monté sur un ~~gd oiseau~~ paon [...], a [...] sept têtes [...] et quatorze bras [...] »（N.a.fr. 23669, f° 299）.

54）セズネックは体中に目のある神（インドラ）をシヴァとみなし（Seznec, *op. cit.*, p. 47）、プレイアード版の注でセジャンジェールは黒い神（クリシュナ）をシヴァだと判断している（*OC,* II, p. 1452, notes 50）。研究者が他の神をシヴァと誤認するほど、シヴァはインド神話において重要な存在だということである。